

年中無休で開園！！ 無料で楽しめる身近な動物園

桐生が岡動物園

1 はじめに

桐生が岡動物園は県内唯一の公立動物園で、入園無料・年中無休で開園しています。

ゾウ、キリン、ライオン、カピバラ、カンガルー、ニホンザル、ペンギン、フラミンゴ、クジャクなどの人気動物に出会え、園内の水族館では海水魚や熱帯魚、カメやワニといった『水中の生き物』の暮らしを覗くこともできます、また、ヤギやミニブタにふれあえる『こどもどうぶつコーナー』もあり、楽しく過ごしながら、たくさんの動物を知ることができます。

2 概要

動物園には、①教育、②レクリエーション、③自然保護、④研究、といった社会的役割(資料①)があります。

また、遠足で利用する幼稚園や小学校が多数あり、実物教育、社会教育、情操教育の場としても活用していただいておりますが、動物園としても、『楽しく学べる』ように各種の行事を行っています。

3 活動の様子

(1) 主催事業

① 第36回動物園一日飼育員(市内小学6年生対象)

『動物の世話』を通じて、思いやりや優しさを養うと共に生き物に対する興味を広げ、自然科学への意識向上を目的として昭和55年から開催しています。例年応募者多数のため、抽選に外れてしまった児童には『半日飼育体験』を行っています。

・平成27年度参加者数 39名 半日飼育体験参加者数 8名

② 第61回動物画コンクール(市内小学生、幼稚園児、保育園児対象)

動物を『観察しながら写生する』ことによって、動物愛護思想と絵画教育の一助とし、動物園の幅広い活用を図るため、昭和29年から開催しています。

入賞作品は10月3日～11月6日まで、水族館内で展示します。

・平成27年度応募総数 1,603点

・入賞作品展示期間内 推定入園者数 61,660人



③ 動物愛護の標語募集(一般対象)

動物愛護週間(9月20日～9月26日)の関連として、動物愛護思想普及のため、7月1日～7月31日に募集しています。

日本動物園水族館協会の中央審査で入選した作品は、水族館内で掲示します。

・平成27年度応募総数 46点

④ 動物慰霊祭（入園者対象）

動物愛護週間の関連として開催しています。1年間に死亡した動物たちに感謝し、安らかな眠りを祈っていただけるように、慰霊期間は自由に参拝できます。

日本各地の動物園に『動物慰霊碑』はありますが、欧米の動物園には見られず、日本独特のものといわれます。



⑤ 各種園内イベント（入園者対象）

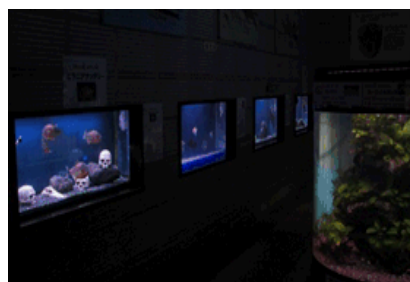
・イズミのお誕生日会



・各動物ガイド、もぐもぐガイド



・ひんやり水族館



・動物と撮影会



・クリスマスイベント



(2) 依頼対応

① 中学生に係る職場体験学習（中学2年生対象）

平成27年度実績 5校 13名（うち市外 2校 5名）

② 動物なかよし教室（市民対象）

平成27年度実績 10団体 343名

③ 標本類の貸し出し 平成27年度1件（頭骨標本を中学の生物授業で使用）

4 おわりに

桐生が岡動物園は60年以上の歴史を持ち、開園以来『桐生を好きな子供を育てた場所』です。利用者の中心は子供たちであり、市内の子供たちに限らず、市外、県外からの子供からも親しまれ、隣接する桐生が岡遊園地と共に『桐生を象徴する場所の1つ』と言えるでしょう。

また、自然の中の動物園として、春の花見、夏の緑陰、秋の紅葉、冬の展望と四季を通じて利用できるため、観光促進面からも機能しており、昨年の推定入園者数は桐生市の人口を大きく上回る31万人となりました。

子供たちが成長して大人になってからも、楽しかった思い出と親しみを持って、桐生が岡動物園を利用し、『桐生を好きな子供』を次世代に繋いでいくことでしょう。

資料①

動物園の役割について

動物園は博物館の1種とされ、①教育、②レクリエーション、③自然保護、④研究、といった社会的役割があります。桐生が岡動物園は『博物館類似施設』になります。

① 教育

動物園は動物の姿や行動を実際に観察することができる実物教育の場です。

目の前にいる『生きた動物』は書物や映像の動物を見た時と違い、大きさ、形、しぐさ、鳴き声、におい、可愛らしさを感じ取れて、楽しみながら学習することができます。

また、解説板を読むことによって、飼育されている動物の正しい名前や分類も分かり、『科学的な目』を養うことができます（資料②参照）。

桐生が岡動物園では、自然や環境、動物の正しい知識や関わり方等を広く知っていただくため、各種の行事や市民の依頼に対応して普及活動を展開しています。



② レクリエーション

動物園は老若男女の区別なく、誰もが楽しめるレクリエーションの場を提供しています。桐生が岡動物園は年中無休、入園無料で開園し、気軽にいつでも利用できます。

訪れた人々は、動物に対する興味ばかりでなく、自然にもふれることができ、桐生が岡遊園地と併せて利用することで楽しく過ごせます。

市外、県外の人たちからも広く親しまれ、年間30万人を超える来園者で賑わっています。



自然に触れ、四季を通じて楽しめる

③ 保護

動物園は『見世物的な娯楽施設』から、『絶滅のおそれのある動物を守る保護施設』へと姿を変え、貴重な動物を増やして、後世に残していく取り組みを行っています。

飼育している動物のほとんどは、『生まれも育ちも動物園』であり、飼育下で血が濃くなることを防ぐために、他の動物園と相談してお互いに動物を交換し、親子間や兄弟間で子供を作らず、血縁のないペアで繁殖できるようにする調整を進めています。

この先、環境破壊や異常気象などで自然界の動物が絶滅してしまっても、各地の動物園が協力と連携を図り、『その動物にふさわしい環境が回復できたとき、動物園から自然界に戻せる取り組み』を進めていく事は重要な使命でしょう。

また、桐生が岡動物園では、群馬県と傷病鳥獣保護管理委託契約を締結し、ケガや事故で救護された野生動物の保護活動を昭和 54 年から行っています。

平成 26 年度の傷病鳥獣保護実績 (1 個体を 1 点とする)

	鳥類		哺乳類		計	
保護数	30種	105点	2種	2点	32種	107点
死亡数	23種	74点	2種	2点	25種	76点
放鳥獣	12種	22点	0種	0点	12種	22点
保護中	2種	9点	0種	0点	2種	9点

④ 研究

動物の研究には未知の分野が多くあります。

野外調査には多くの時間と労力が必要ですが、動物園では、『動物をいつでも観察できる』という利点があります。動物園の職員が行う研究は、展示の工夫や日常の観察を通し、その成果をまとめるものが主体です。

桐生が岡動物園では、平成 20 年に市民文化会館で関東東北地区の『動物園技術者研究会』を開催し、各地の園館から多くの飼育員や獣医師が参加して研究成果を発表しました。そして、平成 28 年には関東東北に北海道を加えたエリア内の技術者研究会の開催園となっており、準備を進めています。

動物園は他で求めることが困難な研究対象物を所有しているため、研究機関から資料提供の依頼が寄せられる場合もあり、死亡した動物の一部を標本素材として博物館へ提供し、広く社会に役立ててもらっています。



県立自然史博物館の展示例。死亡したシマウマやペンギンが標本として役立っている

資料②

動物園の利用例

◎実物教育の場 —本物を体で感じよう—

- ・よく見てみよう → 動物の大きさ、動き方、オスとメスの違い、それぞれの個体を比較することができます。
- ・絵を描いてみよう → スケッチすることで、目の位置や足の形状など、自然に動物の細部まで観察できます。
- ・声を聞いてみよう → 『鳴き声』も展示の1部。
動物の鳴き声や、出す音を聞いてみよう。どんな声で、どんな風に鳴くのか？あまり鳴かない動物もチェックしてみよう。
- ・においをかぐ → 『におい』も展示の1部。
生きている動物は、当然『におい』ます。
動物のにおいを感じ取ってみましょう。
- ・さわってみよう → 動物のぬくもりや、毛触りを感じて親しんでみましょう。



◎情操教育の場

『こどもどうぶつコーナー』で、生きている動物のぬくもりや毛触りを感じて親しみ、動物愛護思想を育むと共に、命の尊さを考えるきっかけとすることができます。

『自分が動物だったらどう思うだろうか？』と思いやる『やさしさ』や、『いたわりの気持ち』が養えるでしょう。



◎科学的な目や動物に対する興味を養う場

- ・ネームプレートを読んでみよう

日常的な呼び名と標準和名の違い

キリン	→	アミメキリン	サル	→	ニホンザル
ペンギン	→	フンボルトペンギン	ゾウ	→	アジアゾウ
ウサギ	→	カイウサギ	ワニ	→	メガネカイマン

- ・分類を学んでみよう

ネームプレートの『○○目』は「もく」と読みます。これは霊長類とか食肉類と呼ばれるまとまりに該当します。よく知られている分類の単位は『○○科』『か』です。『類』もよく使われますが、使われ方はまちまちで定まった法則はありません。

生物の分類上の単位は「界、門、綱、目、科、属、種」が基本です。

例えばライオンを分類単位の基本にあてはめると、動物界、脊椎動物門、哺乳綱、食肉目、ネコ科、ヒョウ属、ライオンとなります。

また、学名はラテン語かラテン語化されたギリシャ語で表記される世界共通の名前で、属名と種名がセットで使われます。例えばライオンの学名は「Panthera leo」で、属名がヒョウ属=Panthera、種名がライオン=leo となります。

・解説板を読んでみよう

動物の前にある解説板は、図鑑の引用だけでなく、飼育員が来園者の疑問や質問に答えるために設置したものもあります。

例 クジャク舎の解説板を読む → いつ、なんのために羽を広げるか分かります。
ペンギン舎の解説板を読む → 南極がふるさとではないことが分かります。

・動物を調べてみよう

動物を『見たら終わり』ではなく、図書館やインターネットを利用して、食べ物、外国名、学名、分類、生態、生息地での生活、気候、そこに住む人との関わりなど、様々な学習につなげることもできます。

◎社会教育の場

訪れる子供たちは、楽しさからついついハメをはずしがちですが、遠足で利用される先生方には、次の『動物園の約束』をお伝えしています。

- ①動物にエサを与えないこと
- ②動物を驚かせたり、水槽をたたかないこと
- ③ゴミは持ち帰ること

◎動物を通じて考えるきっかけの場

可愛らしい姿で人気の高いフンボルトペンギンは、野生下ではエルニーニョ等の異常気象により、絶滅の危機に瀕しています。

エサとなる魚が分布を変えてしまう。めったに雨の降らない営巣地に雨が降り続いて巣が流され、ヒナが育たない。といった悲惨な状況が続いており、このままでは、一気に絶滅してしまう可能性が示唆されています。

そして、こうした異常気象は我々人間の文明生活が引き起こしているといわれています。

動物園で普通に見られるフンボルトペンギンですが、その危機的状況を知ること、同じ地球に住む仲間のため、日常生活の中でできることを探してみましよう。



例えば …… ゴミの減量、分別廃棄、リサイクル、家庭や学校でのエネルギー（電気・ガス・水道・石油）の節約と二酸化炭素の削減などを通じて、環境問題に取り組めます。

◎無料、無休を活用

このように、動物園は独自の利用例がたくさんありますが、1度の来園で成果をまとめることは難しいでしょう。また、動物も季節や天気によって行動が変化しますから、複数回の利用をお勧めします。

桐生が岡動物園は無料、無休で開園しています。

ぜひ時間を確保して「遊び」から「学び」へのご活用ください。